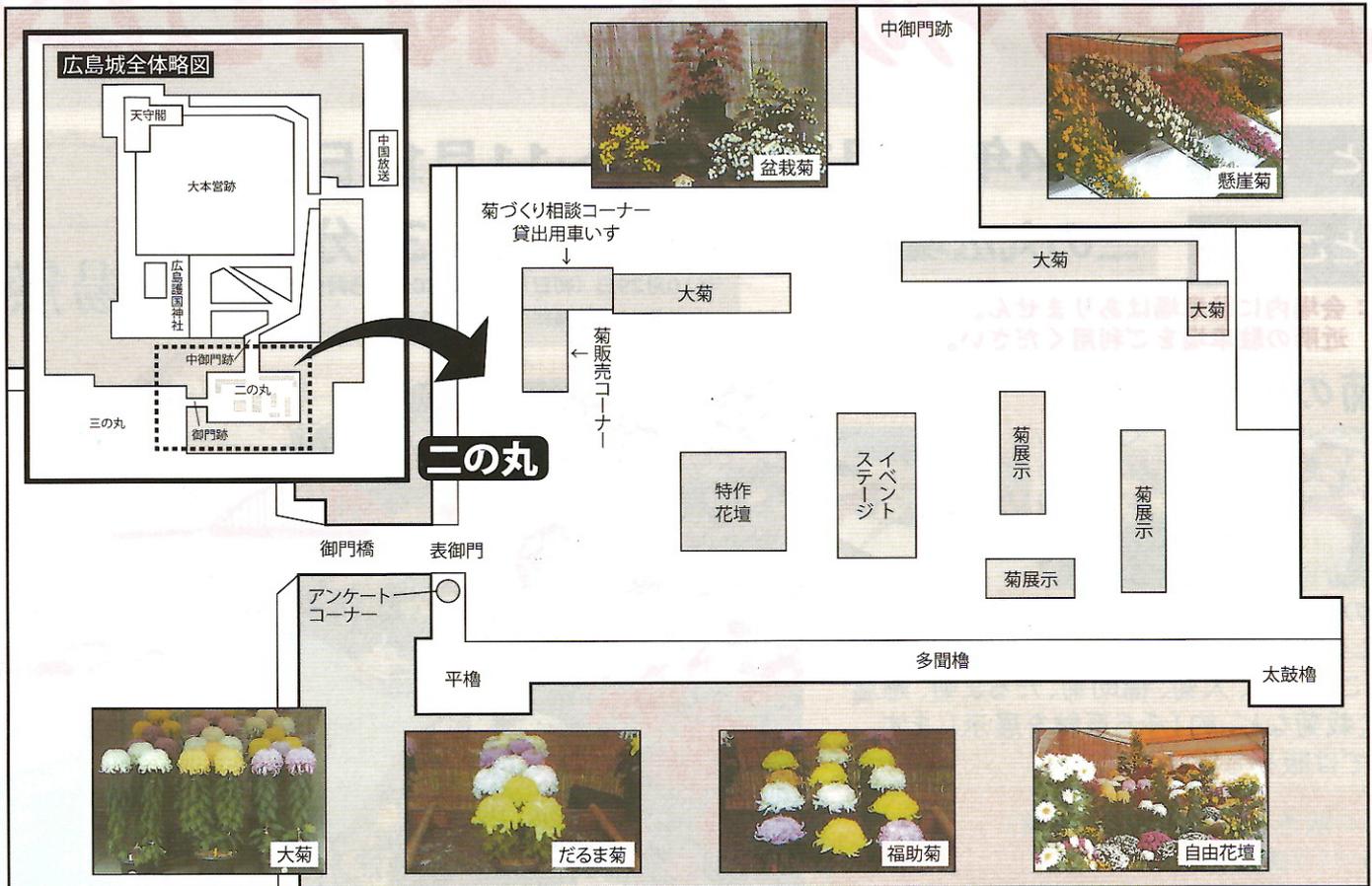


広島城大菊花展 会場案内図



※会場レイアウトは変更になる可能性があります。

菊の歴史～菊は中国伝来の花～

奈良時代末期、菊は、唐時代の中国から日本に導入され、その頃は宮廷人の中で、主に薬草として用いられた。

平安初期になると、中国から秋の重陽の節句とともに観賞の習慣がもたらされ、貴族たちが競って観賞用に栽培を始めた。陰暦9月を菊月と呼び、9月9日を「菊の節句」「重陽の節句」とし、菊花酒を飲む「菊花の宴」「菊花の杯」で邪気を払い、長命を祈った。

鎌倉時代の初め、後鳥羽上皇が菊の花の意匠を好み、「菊花」が天皇家の家紋として定着した頃から、春の桜に対して菊が日本の秋を象徴する花として決定的になり、室町時代に入ってから、庶民の間に広まった。

江戸時代に入ると、花好きで知られる徳川3代の将軍家康、秀忠、家光の影響もあって菊栽培が盛んになり、江戸時代中期以降からは菊合わせ（菊大会）が各地で開かれた。

明治維新で一時的に下火になった菊栽培だが、明治11年の観菊会をきっかけに、大菊全盛時代を迎える。以来、菊は日本を代表する花として今日まで親しまれてきた。

現在でも、在外公館の玄関、パスポートの表紙や国会議員のバッジ、日本の勲章や50円硬貨に、菊がデザインされている。

～菊の種類あれこれ～

◎大菊（三本仕立て）

大菊とは、花の直径が18cm以上のものをいい、中央の一輪だけ残して周りのつぼみを摘む。花の形によって、厚物、厚走り、大掴み、管物、一文字、美濃菊の6通りに分けられる。「三本仕立て」とは、大菊の基本的な仕立て方で、一本の苗から3本の枝を伸ばし、3本の枝に一輪ずつ花を咲かせたもの。一番高い枝が「天」といい、3本の真ん中後ろの枝をそれにする。残りの2本が、「地」「人」といい、背の高さは、天>地>人となる。

◎千輪菊

一本の幹に1,000個くらいの花を咲かせたもので、丸い山のような形をしている。秋にさし芽をした1本の苗をひたすら摘芯（枝数を増やすために芽先を摘むこと）し、半球状に花が隙間なくかつ規則正しく並べ咲かせたもの。千本以上の側枝を育てるのに、200日以上の日数を要し、苗作りから開花までの栽培期間は、18か月前後の長期にわたる。

◎だるま菊（大菊だるまづくり）

ダルマさんのようにずんぐりしていることから、この名前がついた。65cm以下の三本仕立ての小さい物で、培養土も少なく、肥料も少なく済み、そのうえ、場所もあまり広く必要としないにもかかわらず、三本仕立てに負けないぐらい見事な花が咲く。

◎福助菊（大菊福助づくり）

ずんぐりとしたコンパクトな姿が福助人形（幸運を招くという人形で、背が低く、頭の大きな、かみしもを着て座った男の姿をしたもの）に似ていることから、こう名づけられた。仕立て方も簡単で、場所もとらないことから初心者には挑戦しやすい。その名のとおり花は鉢より大きく、裾の葉は鉢を覆うくらい大きく張り出していなければならない。

◎懸崖菊

懸崖作りは、風雪に耐えて懸崖から垂れ下がった老松などを模した小菊の文人作りから派生したものとされる。大きさから、2m以上の大懸崖、1.5m前後の中懸崖、1m前後の小懸崖、50～60cmのミニ懸崖などに分けている。また、形から、懸崖絶壁から垂れ下がったような、上から下にかけただんだん細くなる細長いハート形に仕立てた最も一般的な「前垂れ型」、そのほか「静岡型」、「文人型」、「盆栽型」などがある。

（参考）「大成功するやさしいキクづくり 12か月」（成美堂出版）

「人気品種と育て方 キク」（NHK出版） そのほかホームページ

